

《企画書》

提出者 スグル

【タイトル】 「絶望の中で見つけた光 ～ 絆がもたらす奇跡の力」

【概要】

この物語は、福岡県福岡市博多区で生まれ育った主人公スグルが幼い頃に母親を亡くし、厳しい環境の中で父親や周囲の人々の愛に支えられながら成長していく実体験を描いたものです。両親や友人、近所の人々との絆、喪失の痛みを乗り越えた経験が、スグルの人生哲学を形作り、「人の役に立つ」生き方を目指すきっかけとなりました。学校現場で実際に体挑することで成長する姿が感動的に描かれています。

【想定する読者ターゲット】

- ① 40～70代の男女
- ② 特性：人との「絆」で成長を遂げる姿が描かれている
- ③ 家族や人間関係に悩み、希望を見つけない人
- ④ 実話をもとにした感動的なストーリーに共感する人
- ⑤ 生き方や人生の指針を模索している人

【構成案】

第1章 絶望との出会い

- ・母の死と幼少期の葛藤
- ・愛の存在に気づく
- ・父親との絆と支え
- ・近所や友人との心温まる交流

第2章 学校での挑戦

- ・仲間や教師との出会い
- ・困難を乗り越え、夢を掴むプロセス
- ・人の役に立つ生き方へ

【サンプル原稿】

絆がもたらす奇跡の力

第1章

俺の生い立ち ～「ちゃんとしっかり食べてる？」

夢の中で母ちゃんがいつもそう語りかけてくる。

最近、この夢ばかり見る。小学生の頃の、あの寂しくてたまらなかった日々がよみがえる。

俺は6歳の時に母ちゃんを亡くした。白血病だった。

父ちゃんも仕事でほとんど家にいなくて、俺は団地の部屋で一人で過ごすことが多かった。

隣の家から聞こえてくる笑い声が、たまらなく羨ましかった。

楽しそうな家族の姿を窓越しに見るたびに、

「なんで俺だけこんな目に遭わなきゃいけないんだ？」って心は叫ぶ！

母ちゃんは入院中も優しかった。父ちゃんや叔母さんに連れられて病院に行くと、俺の話を楽しそうに聞いてくれた。幼稚園で何があったとか、友達がどうしたとか、遊んだ話なのに、母ちゃんは笑顔で「それでどうなったの？」っていつも聞いてくれた。その笑顔を見るたび、「母ちゃんが早く家に帰って来てくれたらいいのに」って心の底から思った。

でも、そんな願いは叶わなかった。

入院から7ヶ月、夏の暑い日、母ちゃんは逝った。

最期の言葉は「退院したら美味しいものを作るからね」

俺はただ頷くだけで、それが最期になるなんて思いもしなかった。

葬式の日、俺は泣かなかった。いや、泣けなかったんだ。

あまりに現実が重すぎて、心が何も感じなくなっていた。

でも、霊柩車に乗って火葬場へ向かい、目の前で母ちゃんが燃えていくのを見たとき、止めどなく涙が溢れた。堪えられなくて、声を上げて泣いた。

初めて「母ちゃんがいなくなったんだ」って痛いほど実感した。

それから何十年も経ったけど、母ちゃん言葉は俺の中に生きている。
「ちゃんとしっかり食べてる？」その声が今でも夢の中で聞こえるたびに、
胸が締め付けられる。

母ちゃんはもういないのに、ずっと俺を気にかけてくれてる気がするんだ。

母ちゃん、俺はちゃんと食べてるよ。

だけど、本当はあの日の「美味しいもの」が食べたい

母ちゃんが作るはずだった、母ちゃんのご飯。
一緒に食べたかったよ。

ありがとう、母ちゃん。俺、頑張るね！

「俺がいるよ」

人生には、数えきれないほどの出会いがある。

その中で「彼ら」と出会えたことは、奇跡に近いのかもしれない。

俺には、そんな奇跡のような親友が2人いる。

小学校低学年のときに会った「修一」と「輝真」だ。

修一は7人兄弟の末っ子で、お母さん一人に育てられた子だった。

輝真は3人兄弟の末っ子で、お父さん一人に育てられた子だった。
どちらも厳しい家庭環境で育ちながら、いつも明るく、誰よりも優しい奴らだった。

放課後になると、3人でお互いの家を行き来して遊んだ。
くだらないことで笑い合ったり、好きな女の子の話をしたり。

夜になるのが惜しいくらい、時間を忘れて夢中になっていた。そんな毎日が、ずっと続く
と思っていた。

中学、高校と進むにつれて3人は別々の学校に進学した。

それでも、変わらなかった。休日には集まって、馬鹿みたいな話をしては笑い、また会える日を楽しみにして別れた。

こんな楽しい日々が永遠に
続くものだ、どこかで信じていた。

でも、人生はそんな甘いものじゃなかった。

ある日、輝真のお父さんが神社で刺されて死んだという知らせが届いた。

信じられない思いで胸がいっぱいになった。怒り、悲しみ、どうしようもない虚無感が、
胸の中に渦巻いた。

学校が終わると同時に、俺は走って輝真の家に向かった。

玄関を開けると、輝真がいた。

何も言えなかった。ただ涙が溢れた。

輝真も、何も言わずに泣いていた。

あのとき、俺は何もしてやれなかった。

ただ、そばにいることしかできなかった。

だけど、それしかできなくても、俺はその場を離れることができなかった。

その後も、人生の試練はやってきた。

俺の親父が死んだ。

静かな病室で、修一がずっとそばにいてくれた。

親父が息を引き取るまで、修一は俺の肩に手を置いて、何も言わず、ただそこにいてくれた。

どれだけ救われたか、言葉では到底表せない。

人生が辛いとき、人はどうしても独りだと思い込んでしまう。

でも、あのときの修一の存在は、俺を独りにさせなかった。

悲しみや絶望に押し潰されそうになりながらも、
友達がそばにいてだけで、ほんの少しだけ息ができるような気がした。

思い返してみれば、俺たちは子どもながらに、お互いの痛みを共有し、支え合っていたんだと思う。
言葉なんかなくても、ただ一緒にいてだけで救われていた。

大人になった今は、あのときの出会いがどれほど特別なものだったかがよく分かる。
人と人が出会うのは偶然じゃない。何かしらの意味があって、運命に引き寄せられるものなんだと思う。
修一と輝真に出会えたことで、俺はどれだけ人生の苦しさを乗り越えられただろうか。

愛や友情は、簡単には言葉にできない。でもそれは、俺たちが生きていくための原動力そのものだ。
友達がいてくれるから、俺たちは何度でも立ち上がれる。そして、その絆は一生俺の心に刻まれ続けるだろう。

修一、輝真。本当にありがとう。お前たちがいてくれて、俺は生きてこれた。
もしあの頃お前たちがいなかったら、俺はきっと今の俺じゃなかった。

お前たちは、俺の人生そのものだよ！

[以上となります。よろしくお願いたします]